

第3章 現状と課題

3.1 名勝

本節では、対象区域における名勝の本質的価値の保存状態を指定当時との景観の比較に基づき述べるとともに、現地調査や聞き取りで確認された問題点を示し、今後の保存管理上の課題を提示する。また、想定される南海トラフ地震の発生前後において予測される本質的価値の改変リスクについても言及する。なお、名勝の詳細解説（2.2.1 本質的価値）にある「亜熱帯性常緑広葉樹林」と「海浜植物」に関する現状と課題は、次節（3.2 天然記念物）で触れる。

3.1.1 景観からみた本質的価値の保存状態

1) 景観の変化

(1) 土地利用

図 3.1 に室戸岬の 1899（明治 32）年以降の略年表、1947（昭和 22）年、1975（昭和 50）年および 2015（平成 27）年撮影の空中写真、対象区域および周辺地域の土地利用の変化の概略を示す。また、室戸岬の土地利用の現況図を図 3.2 に示す。

室戸岬における景観の保存と活用に係る取組は、1927（昭和 2）年の鼻回り線開通および日本新八景選定、翌 1928（昭和 3）年の国名勝指定の頃に始まったことがうかがえる（図 3.1）。この頃に弘法大師像や中岡慎太郎像の建立、保勝会館の落成といった観光面の整備が行われたものの、1940 年代に太平洋戦争、昭和南海地震といった大きな動乱および災害に直面している。そうした混乱が収束しつつあった 1950 年代半ばに「高知県立自然公園」に指定され、この頃から室戸岬にも観光客が増え始めた。1960 年代半ばには「室戸阿南国定公園」の指定を受け、高度経済成長期のマイカー普及と観光ブームによって観光客数は 1963（昭和 38）年の 226,800 人（県内 168,800 人・県外 58,000 人）から 1971（昭和 46）年の 485,200 人（県内 320,200 人・県外 165,000 人）に倍増した（室戸市，1989）。こうした時代の流れの中で、1970 年代には国道 55 号の拡幅、対象区域西側での室戸スカイラインの建設、海岸への乱礁遊歩道の敷設のほか、ホテルの新築や駐車場の整備をはじめ室戸岬一帯で様々な利用施設の整備が相次いだ。

1975 年 11 月の空撮時点までに対象区域における土地開発は概ね完了し、以降は乱礁遊歩道以外に目立った開発が行われていない（図 3.1）。また、3 枚の空中写真から、1947 年以降、対象区域の内外で農地の樹林化が認められたほか、国道 55 号より海側の海岸部において植生の拡大が見て取れる。なお、1947 年は昭和南海地震の翌年にあたるが、室戸市史によれば、この地震によって室戸岬周辺の土地は約 110cm 隆起したとされる（室戸市，1989）。

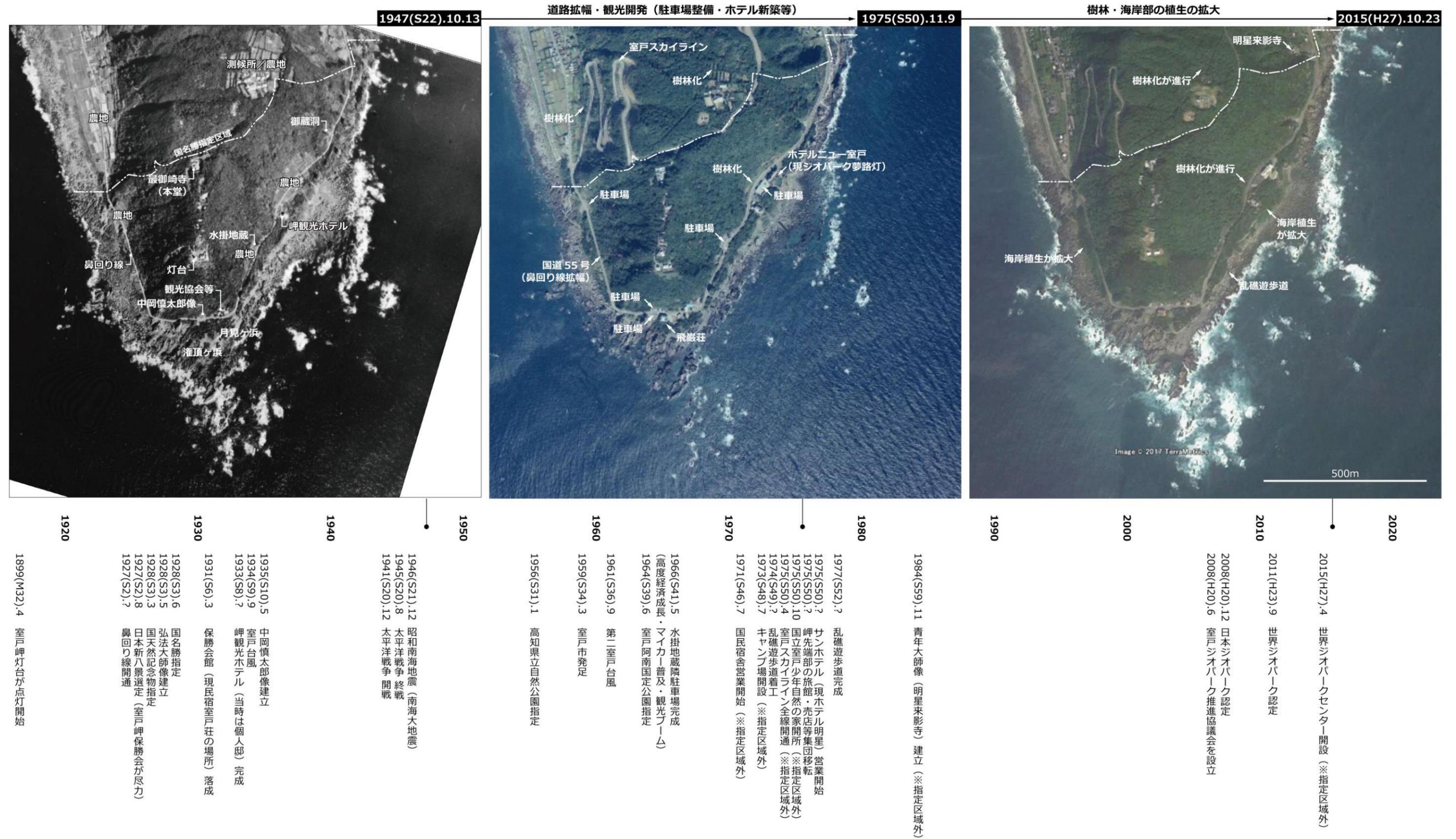


図 3.1 対象区域および周辺地域の土地利用の変遷
資料：1947年・1975年は国土地理院発行の空中写真、2015年は Google Earth を使用。

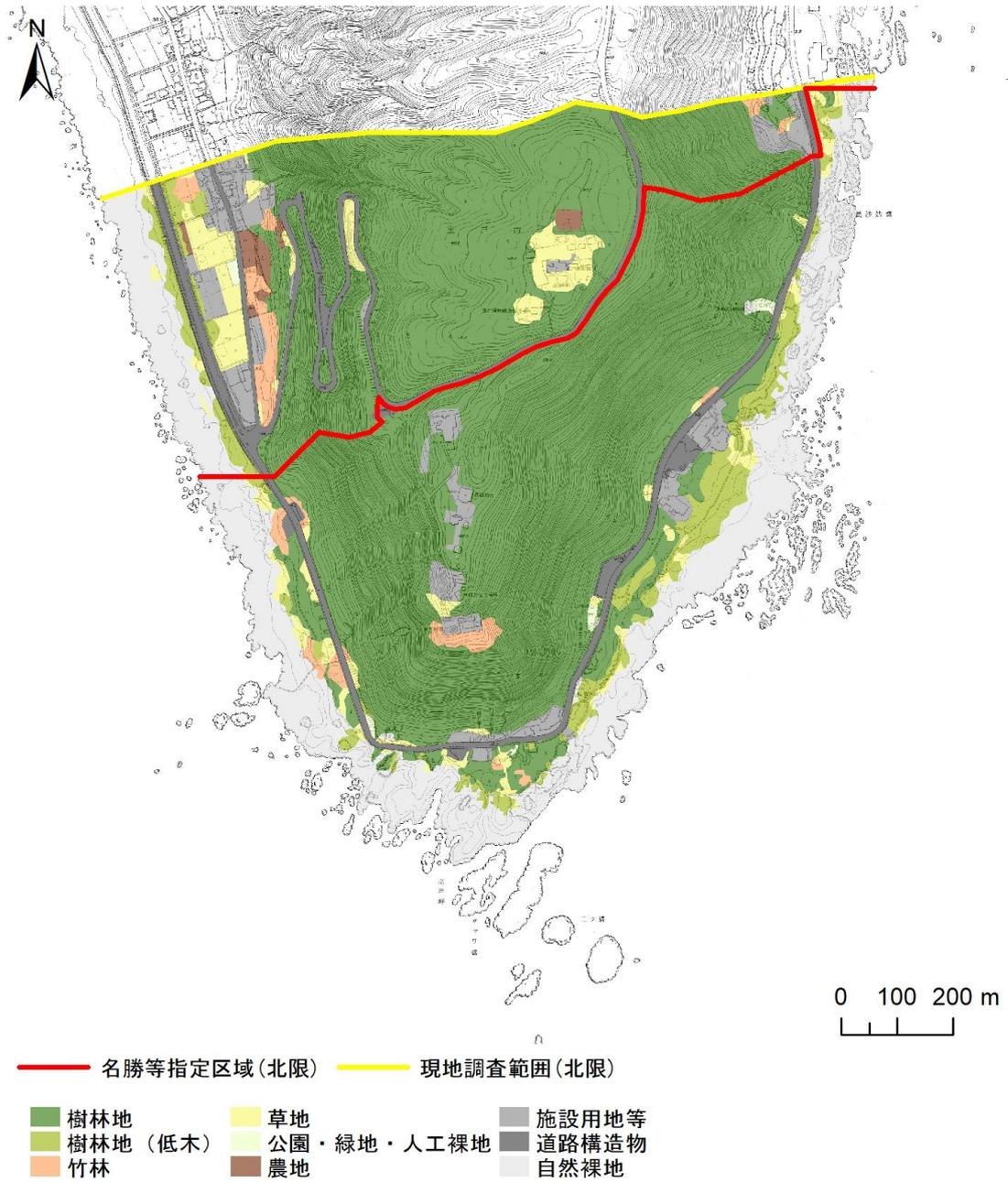


図 3.2 対象区域および周辺地域の土地利用の現況
 (空中写真 (Google Earth) と対象区域および周辺の植生図 (図 3.7) を基に作成)

(2) 海岸・露頭・海食洞

◆岩石海岸および乱礁遊歩道沿いの露頭

灌頂ヶ浜、月見ヶ浜と名付けられた砂浜が岬の先端部に位置しているが、国道 55 号より海側は岩石海岸が大半を占めている。保存対象として重要な地質・超極微地形には固有の呼び名があり、土地の隆起による露頭にビシャゴ岩、エボシ岩（いずれも斑レイ岩）、波食による甌穴状の超極微地形に行水の池、目洗い池、亀の池がある。

隆起地形について述べると、ビシャゴ岩の外観は、昭和初期の写真¹との比較から判断する限り、大きな変化は認められない。一方、エボシ岩は 2011（平成 23）年頃より上部の剥落が懸念されていたが、2018（平成 30）年 6 月 22 日に懸念箇所の剥落が確認された。



ビシャゴ岩

(左：1930 年頃（昭和初期） 右：2017（平成 29）年 10 月 12 日)



エボシ岩

(左：1930 年頃（昭和初期） 右：2017（平成 29）年 7 月 11 日)

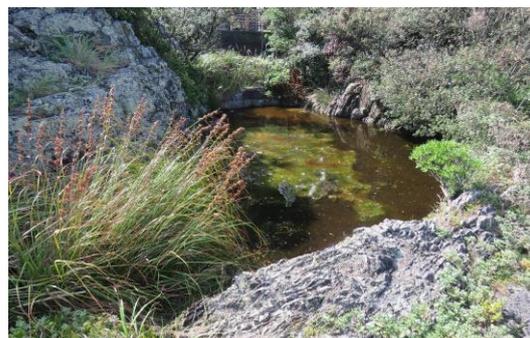
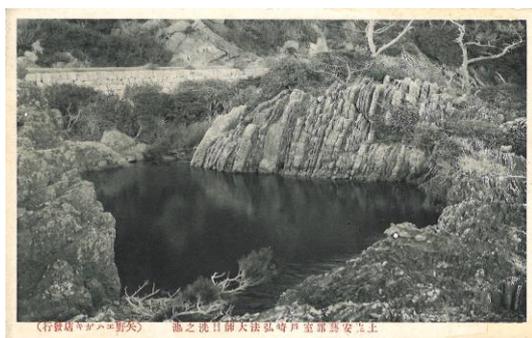
波食部に関しては、行水の池は周囲に乱礁遊歩道や看板が整備されたものの、概ね当時の外観を留めている。一方、目洗い池は国道 55 号の拡幅に伴う路側擁壁が迫り出したことで国道側の形状が変化し、従前と同じ視点から鑑賞できなくなったため、外観の変化については評価し難い。亀の池は、室戸岬町史や住民の話によると、行水の池の東隣の波食部を指すものと考えられるが、位置および範囲に不明な点があり、評価は不可能である。

¹ 本項で用いた昭和初期の写真は全て、1930 年頃発行の絵葉書から転載したものである。



行水の池

(左：昭和初期 (1930 年頃) 右：2017 年 7 月 11 日)



目洗い池

(左：昭和初期 (1930 年頃) 右：2017 (平成 29) 年 7 月 11 日)



亀の池

(左：昭和初期 (1930 年頃) 右：2018 (平成 30) 年 1 月 24 日)

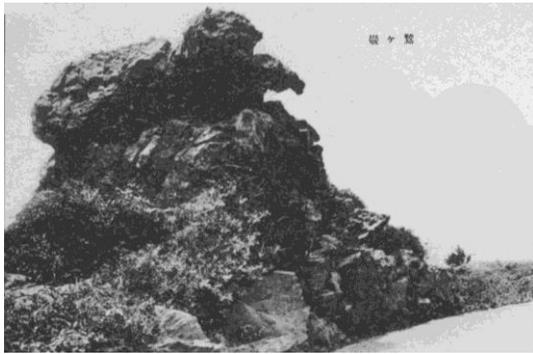
◆国道 55 号沿いの露頭

国道 55 号沿いの代表的な露頭として、当名勝の西入口付近にある高岩と鷲ヶ岩、御蔵洞の南側に所在する天狗岩がある。高岩と鷲ヶ岩は国道拡幅後において剥落が危惧されたことから、室戸岬市議会の決議によりそれぞれ山切りが行われ²、大きさと形状が変化した。天狗岩の植生は拡大しているものの、形状自体に目立った変化は見られない。

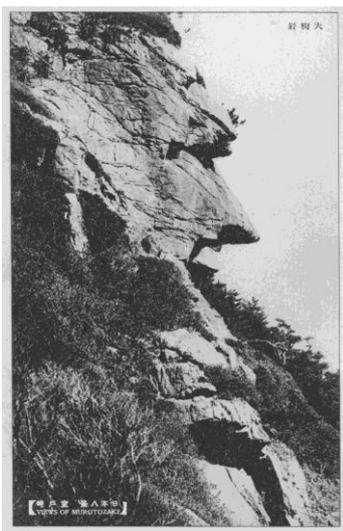
² 決議および山切り工事の時期は、記録の所在を含め不明。



高岩
(左：1930年頃（昭和初期） 右：2017（平成29）年8月21日）



鷲ヶ岩
(左：1930年頃（昭和初期） 右：2017（平成29）年8月21日）



天狗岩
(左：1930年頃（昭和初期） 右：2017（平成29）年10月12日）

◆御蔵洞

空海伝説が残る御蔵洞は海食崖に開いた海食洞である。崖面に向かって右側が神明窟、左側が御厨人窟と呼ばれる。前者が空海の修業場所、後者が寝食場所とされる。それらの前に広がる低平地は波食台で、駐車場として使用されている。

洞内については、コンクリートの参道が造られたほかに目立った変化はない。御蔵洞の外部については昭和末期との比較となるが、外観に目立った変化はない。しかしながら、剥離作用による落石や上部からの転石が相次ぎ、巡拝や見学等が危険な状態になったことから、平成29(2015)年11月に室戸市教育委員会生涯学習課が立入防止柵を設けて以降、入洞が禁止されている。



御厨人窟

(左：1930年頃(昭和初期) 右：2017年(平成29)12月27日)



御蔵洞(御厨人窟および神明窟)

(左：1988年頃(昭和末期) 右：2017(平成29)年10月12日)

(3) 歴史的建造物

◆最御崎寺（東寺）

最御崎寺は東寺とも呼ばれ、現在地における創建は寛徳年間（1044～1055 年）頃とされている。1563（永禄 6）年に落雷による火災で消失し、天和年間における僧最勝による再興、明治初期の神仏分離令による荒廃、1914（大正 3）年の再建を経て現在に至る。

昭和初期との比較における主な変化としては、1648（慶安元）年に竣工した鐘楼堂の背後への多宝塔の建立（1980（昭和 55）年）、護摩堂隣への聖天堂の造営（明治期）、客殿（遍路センター）の新築（1998（平成 10）年）が挙げられる。また、空海伝説が残る鉦石の周辺を含め、石張の参道が新設されている。こうした変化を経てもなお境内は落ち着いた雰囲気を保ち、四国霊場八十八箇所の札所に相応しい景観が維持されている。



本堂・大師堂・鐘楼を含む境内
（左：1930 年頃（昭和初期） 右：2017（平成 29）年 12 月 1 日）



護摩堂およびその周辺
（左：1930 年頃（昭和初期） 右：2017（平成 29）年 9 月 22 日）

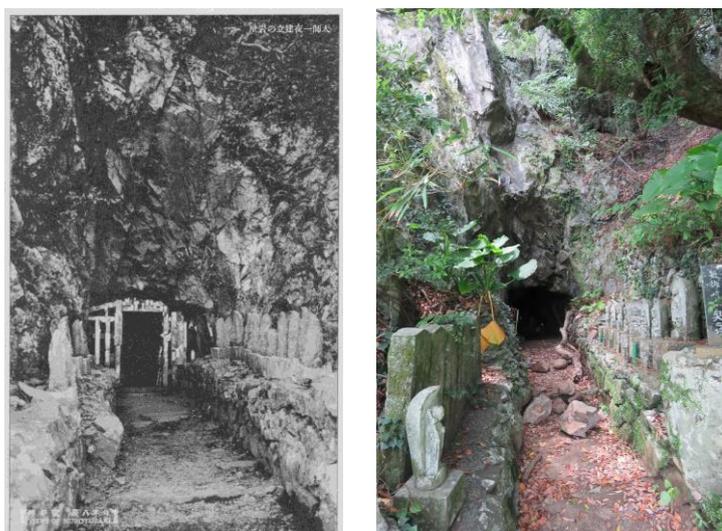


鉦石
（左：1930 年頃（昭和初期） 右：2017（平成 29）年 9 月 22 日）

◆一夜建立の岩屋

一夜建立の岩屋は、空海が一夜にして建立したと伝えられる。後述する遍路道の上り口付近に所在し、1916（明治5）年に最御崎寺の女人禁制が解かれるまでは、女性のための納経所が置かれていた。現在は最御崎寺の奥の院となっている。なお、1913（明治2）年に岩屋内で発見された如意輪観音半跏像は、石像としては高知県唯一の国の重要文化財に指定されている。

昭和初期との比較において、参道沿いの石仏の数や石灯籠の有無などに違いが見られる。2017（平成29）年8月21日の踏査時には、参道脇の樹木の枝葉が覆い被さり、参道入口前の広場から岩屋への眺望を妨げていた。また、参道に人頭大の落石が見られた。



一夜建立の岩屋および参道の外観
 （左：1930年頃（昭和初期） 右：2017（平成29）年8月21日）



参道入口前広場の外観
 （左：1930年頃（昭和初期） 右：2017（平成29）年8月21日）

◆遍路道

遍路道は国道 55 号に上り口を持ち、一夜建立の岩屋と最御崎寺の山門とを結ぶ小道である。北に向かって上り始めるこの小道は、捻岩を経た後、中ほどで南西に大きく向きを変え、展望東屋を経て山門に至る。小道の大半は未舗装の斜路であるが、上記の屈曲地点より下部にはコンクリート階段が、上部には石張や石段が部分的に見られる。

資料がないため遍路道の変遷は不明であるが、2017（平成 29）年 8 月 21 日の踏査時において上記の構造物に目立った損傷はなく、雨水の集中による深掘れや野生動物による掘り返しによる周辺地盤の目立った浸食も生じていない。路側の崩壊等もないことから、現状では施設管理上の問題は特にないと判断される。



上り口（左）・捻岩（中）・最御崎寺山門（右）



石段・石張

◆水掛地蔵

水掛地蔵は、空海が有縁無縁の仏の菩提を弔うために建立したとされる³。現在、約250体の石仏が安置されており、その殆どは海難事故で亡くなった人々を弔ったものである。水を欲しがりつつ海難死した人々を偲び、水を掛けて供養が行われる。春秋の彼岸はお鼻参りといわれ、多くの参拝者が訪れる。

昭和初期との比較では、石仏が増え、山側の植生が成長しているものの、概ね当時の姿を留めている。敷地南西には石仏群と併せて景観上重要な門がある⁴。コンクリート基礎に瓦屋根の木造躯体を乗せた比較的新しいものであるが、形式および意匠の変遷については、記録が残っていないため不明である。

国道55号から撮影された昭和末期の写真との比較からは、建造物の保存状態はよいが、植生の成長が目立つ。



水掛地蔵の外観

(左：1930年頃(昭和初期) 右：2017年(平成29)年8月21日)



国道55号から見た水掛地蔵の外観

(左：1988年頃(昭和末期) 右：2017(平成29)年8月21日)

³ 建立年代は不明。なお、室戸市史の記録によれば、最も古い地蔵の建立年は1927(昭和2)年とされる。

⁴ 門の名称および建造年は不明。